

遠くの学究が深奥に迫っているとは、なんと  
も面白映ゆいものである。

その棠三先生の仕事の基本は、膨大なカーネギーに基づく徹底したデータ主義であった。権威やなまじいな理論は先生の流儀ではなかつた。そしてそのデータは、口承、文献のどちらにも博搜していた。それは言葉遊びが、耳と文字との両方に関わっている世界であるといふ認識のもと、それを担つてきた庶民の言語意識への共感に基づくところから出発していたように思われる。

一体、この種の言語遊戯は、文学としては、低俗なものとしか評価されないのが常であります。が、言語遊戯が発生する事情を考えると、言語生活における反省、ことばを吟味する興味に根ざしていることは言うまでもありません。ただ、それが言語のみに関する意識に止まつて、文学意識にまで昇華されていないために、低俗と評されるのであります。それにもしても、そのような言語への関心が、表現の発達に寄与しない道理はなく、またこのような好尚が、民衆を文芸に近付けるのに大きな働きをしたことを否定するわけには行きません。

### 『(い)とば遊び辞典』「はしがき」

ませて欲しいと願うものである。鈴木棠三は目標ではあっても、なまなかに越えられる存

ここに棠三先生の言を持ち出したのは、「いつの日か鈴木さんの掌から離れて、あらためて咄・雜談論の総合を期そう。」とする著者の意気込みへの期待である。文献の渉猟に合せて、今以上に口承の世界にも目を向け、

そのデータを収集して咄・雜談の世界を膨らませて、今までの研究者たちの意気込みへの期待である。文献の渉猟に合せて、今以上に口承の世界にも目を向け、

(三弥井書店、一四〇〇〇円)  
(はなべ・ひでお／國學院大學非常勤講師)

書評 橋本裕之著

### 『王の舞の民俗学的研究』

保坂 達雄

『王の舞の民俗学的研究』。本書はその学位論文に基づいた五百頁を越える大著である。

王の舞は、袴襷装束を着用し鳥甲に赤い鼻高面をつけて行列を先導し、祭礼芸能の中で田楽・獅子舞などに先立つて演じられた民俗芸能の一つである。歴史的には平安末期から鎌倉初期にかけて奈良・京都の大社寺で行われた中世芸能であったが、現在は福井県の若狭地方を中心にして滋賀・京都・兵庫などの祭礼に伝えられている。時間にして一時間足らずの、祭礼芸能の中の一演目でしかない王の舞について序章で次のように述べている。すなわち、民俗芸能は多く儀礼や祭礼の一環を構成しているにもかかわらず、これまでの民俗芸能研究は個々の対象を記述するだけに止ま

り、儀礼や祭礼に規定されながら存在している民俗芸能の存在形態を関係論的に記述していなかった、と。これまでの民俗芸能研究に対する方法論的批判が本書のスタイルを徹底させたのである。ここでは民俗芸能に見られる動態的芸能史は言うに及ばず、そこに窺われる民俗的世界観の構造、さらには近代化の過程における諸問題までも主題化して論究されている。

確かに歴史学的研究と民俗学的研究と美学的研究とを問わず、これまでの民俗芸能研究は対象の主題化を急ぐあまり、それを取り巻く関係論的視座を欠落させてきた。民俗芸能こそは変容する歴史的動態と地域的風土的条件に規定されて存在しているのであって、芸能それ自体だけを単独に取り出して論じてみても、十分に記述したことにはならない。とすれば、そうした関係性までも視野に收めた論述の方法が採用されなければならないはずである。その意味で本書はこれまでの民俗芸能研究を相対化する方法的可能性を存分に窺わせる、きわめて意欲的な書物と言えよう。そこでも本書の構成を示そう。

序章 第一部 王の舞の民俗史

第七章 差異と反復——民俗社会における芸能——

第一章 王の舞の成立と展開

終章

第二章 王の舞の分布と特色——若狭地連に触れて——

第四章 若狭の一つ物・補遺

第五章 王の舞の修辞学

第六章 風土としての芸能

第七章 聖なる水の湧きたつところ

第八章 王の舞の解釈学

第二部 王の舞の民俗誌

第一章 仕掛けとしての演劇空間——弥

美神社の祭礼と芸能——

第二章 演じられる現実——王の舞をめぐる民俗的変容の一考察——

第三章 砂のある舞台——弥美神社の王の舞をめぐって——

第四章 語られた起源——織田神社の祭祀と芸能——

第五章 異化する視線——木野神社の祭礼をめぐって——

第六章 福井県三方郡美浜町麻生の若者組・資料——

全体は大きく「王の舞の民俗史」と「王の舞の民俗誌」の二部に分れる。第一部「王の舞の民俗史」では前半の四章で中世社会に成立した王の舞の歴史と民俗社会への変容の過程を詳細に跡付け、後半の四章では修辞学的、解釈学的、トポロジー的などさまざまな視座を用いてこの芸能の意味論的分析が加えられる。各章の要旨を纏めると次のようになる。

第一章 「王の舞の成立と展開」は、文献と絵画史料に基づいて王の舞の歴史が跡づけられる特徴が指摘される。この芸能は王の舞・田楽・獅子舞の芸能構成の中で成立したこと、中世においては職業的芸能座によって演じられたこと、また從来舞楽・伎楽系統の外来系の芸能であったとする先行研究を踏まえて、その機能を「本来邪靈を払い道行く先を鎮めるために行われた呪術性の強い芸能であった」(四七頁)とする論が提出される。第二章「王の舞の分布と特色——若狭地方を中心として——」では、京都・滋賀・兵庫の三県の事例が列挙された後、若狭地方一六例の事例

をめぐつて西部に少なく東部・中央部に集中すること、その特色として子供が演じる事例が若狭には多いが、大人が演じるのが本来であり若狭のは二次的形態であること、また樂器は鉦打太鼓・笛が本来であったことなどを指摘する。第三章「若狭の一つ物——王の舞との関連に触れて——」は、始めに祭礼に登場する一つ物の研究史を整理した後、若狭においては風流の芸能として子供の演ずる王の舞に一つ物の影響が見られるとした。第四章「若狭の一つ物・補遺」は新史料によるその補遺である。

第五章「王の舞の修辞学」は、「王の舞に付加された神話・伝承・儀礼・習俗などをテクストとして、その中に込められたさまざまな観念を読み取ってゆくいわば修辞学的アプローチ」（一六八頁）である。そこで著者は米訪神と外来王、開発神と文化英雄、豊饒と生命力など、錯綜するさまざまなイメージが王の舞に投影されていたと指摘する。第六章「風土としての芸能」では、「与えられた自然環境の独自性が、そこで演じられる芸能の様態に大きな影響を及ぼす」（一八九頁）とする視点に立って、若狭地方の王の舞と地域のコスモロジーとの関わりを、風土と人間の関

係の中に探し出す。その結果、ここには海彼方へ向かうベクトルと山を越して京都・奈良へと志向するベクトルが存在するとする。第七章「聖なる水の湧きたつところ」は、若狭の國のトポロジー論である。東大寺二月堂修一会のお水取り及び八百比丘尼の伝説に注目して、若狭の國が常世の國に最も近い聖なる水の湧きたつところだと論じる。最後の第八章「王の舞の解釈学」では、王の舞と猿田彦の形象との関連や、神輿を先導し田楽や獅子舞に先立つて演じられる露払いの性格などから、著者は王の舞を獅子舞や田楽などの芸能を祭場に引き入れるための道拓きの芸能であつた、と解釈する。その上で、王の舞と方堅めとの関連についても論及する。王の舞を方堅めの芸能だと解釈する言説は研究者のもので、これを実証する史料は見出し難いが、

第一章「仕掛けとしての演劇空間——弥美神社の祭礼と芸能——」は、まずこの神社に同町木野の木野神社の祭礼と芸能を取り上げ瓦る現地調査の集大成である。第一章から第三章までは福井県三方郡美浜町宮代の弥美神社、第四章は同町佐田の織田神社、第五章は同町木野の木野神社の祭礼と芸能を取り上げて諸事象の民俗誌を作成し、併せて構造論的視座に立脚しながら祭礼における王の舞の意味と機能を分析している。

第一章「仕掛けとしての演劇空間——弥美神社の祭礼と芸能——」は、まずこの神社に同町木野の木野神社の祭礼と芸能を取り上げて諸事象の民俗誌を作成し、併せて構造論的視座に立脚しながら祭礼における王の舞の意味と機能を分析している。

第一章「仕掛けとしての演劇空間——弥美神社の祭礼と芸能——」は、まずこの神社に同町木野の木野神社の祭礼と芸能を取り上げて諸事象の民俗誌を作成し、併せて構造論的視座に立脚しながら祭礼における王の舞の意味と機能を分析している。

第一章「仕掛けとしての演劇空間——弥美神社の祭礼と芸能——」は、まずこの神社に同町木野の木野神社の祭礼と芸能を取り上げて諸事象の民俗誌を作成し、併せて構造論的視座に立脚しながら祭礼における王の舞の意味と機能を分析している。

の一考察——は、中央から若狭地方に伝播した王の舞が、地域の抱える独自の論理によつてさまざまに変形して受容されてゆく様相を、第一章で紹介した弥美神社の王の舞の芸態の克明な記述を通して明らかにしている。他の地域に比べこの王の舞は、極端に不自然な動作と姿勢を身体に要求する、独自の演技内容をもつ芸能となつてゐる。著者はその理由を清義社と呼ばれる若者組の、集落の一人前の成員として認知されるために課せられる通過儀礼に求めている。生理的心理的に厳しい試練は、集団の一員としての諸規範を身体感覚として認識させるための教育システムだととするのである。第三章「砂のある舞台——」は、弥美神社の王の舞をめぐつて——

他の地城に比べこの王の舞は、極端に不自然な動作と姿勢を身体に要求する、独自の演技内容をもつ芸能となつてゐる。著者はその理由を清義社と呼ばれる若者組の、集落の一人前の成員として認知されるために課せられる通過儀礼に求めている。生理的心理的に厳しい試練は、集団の一員としての諸規範を身体感覚として認識させるための教育システムだととするのである。第三章「砂のある舞台——」は、弥美神社の王の舞をめぐつて——

他の地城に比べこの王の舞は、極端に不自然な動作と姿勢を身体に要求する、独自の演技内容をもつ芸能となつてゐる。著者はその理由を清義社と呼ばれる若者組の、集落の一人前の成員として認知されるために課せられる通過儀礼に求めている。生理的心理的に厳しい試練は、集団の一員としての諸規範を身体感覚として認識させるための教育システムだととするのである。第三章「砂のある舞台——」は、弥美神社の王の舞をめぐつて——

他の地城に比べこの王の舞は、極端に不自然な動作と姿勢を身体に要求する、独自の演技内容をもつ芸能となつてゐる。著者はその理由を清義社と呼ばれる若者組の、集落の一人前の成員として認知されるために課せられる通過儀礼に求めている。生理的心理的に厳しい試練は、集団の一員としての諸規範を身体感覚として認識させるための教育システムだととするのである。第三章「砂のある舞台——」は、弥美神社の王の舞をめぐつて——

能が地域社会の中で受容され機能してゐることを重視するなれば当然の視点であるうし、

起源譚や伝承と祭礼との関わりも、日本神話

と祭祀が分からちがたく結び合つてゐる相関関係を考慮するならば、納得のゆく視点なのである。

本書所収の各論考と時期を等しくして、著者は民俗芸能研究を根底から問い合わせた一連

の理論研究を陸續と発表した。「これは『民俗芸能』ではない」(小松和彦編『これは『民俗学』ではない』1989.8 福武書店)、「文化としての民俗芸能研究」(『民俗芸能研究』第

10号 1989.11)、「民俗芸能研究における現在」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第

117集 1990.3)、「民俗芸能の知的可能性」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第三四集 1991.3)、「正しい民俗芸能研究」(第0号 1991.12 民俗芸能研究の会／第一民俗芸能学会)、「芸能の条件——「招かれざる客」再考——」(『新編』1993.2)、「民俗」と「芸能」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第51集 1993.11)などの諸編を通して、半世紀に及ぶ民俗芸能研究の学説史を始まりに遡つて再検証し、用語を問い合わせし、新たな方法論を模索し、今後の学的 possibility を追究している。

本書はこうした理論研究と相俟つての個別実証研究なのである。

各論考がそれぞれ個別に発表されたという

経緯も手伝つてか、記述内容・参考文献・写

真などに繰り返しや重出・重複が多く見られ

るのが気になった。そうした瑣末な点は別に

(ほさか・たつお／東横学園女子短期大学)

## 書評

稻田浩一著

### 『昔話の源流』

松原孝俊

口承文芸である。タイプは、語り手たち

が共有する、文芸形象の核心である。民族の伝承に裏打ちされた、最大多数の語

り手たちの、人生観照の結果である。」

(第二八卷) 一九八八年、一頁)

「遠祖から今に受け継がれてきた昔話に、インデックスの比較と、国内の日本昔話のタ

イプ研究の対照を試み、昔話の比較研究と通

がゆえに、彼は「国際的・民族的なタイプ・

私は畏敬の念を抱いている。私の学的関心は、個々の昔話の時代性を強調してもいる。

昔話の文芸性に向けられていく。——(中略)——昔話はいわば総合的に演出される

して、著者渾身の力量を發揮した、民俗芸能研究に新たな時代の到来を予感させる一冊である。

(一九九七年二月、ひつじ書房、

九二二三三円)

(ほさか・たつお／東横学園女子短期大学)

文集である。なるほど稻田の前著『昔話の時